

## ホスピスボランティアイメージ形成に関する基礎的研究 ホスピスボランティア養成講座を通して

鈴木 聖子・山本 克彦・吉田 清子・櫻 幸恵

### Study of the formation of the image of hospice volunteers through a training course for hospice volunteers

Seiko SUZUKI · Katsuhiko YAMAMOTO · Seiko YOSHIDA · Yukie Sakura

The purpose of the current study was to examine how students formed images of hospice volunteers through a training course for hospice volunteers. Subjects were 61 students. Analysis was made in two steps based on descriptions they wrote before and after the course. In step 1, we extracted 6 similar items from the descriptions and compared them between pre- and post-course items. Furthermore, we chose 3 of the 6 items that were considered worthy of detailed analysis and selected these items to be the main points in the analysis.

For step 2, we examined qualitatively the volunteer's images provided in the post-course descriptions. As a result, we found 141 descriptions of significance, that we summarized into 7 items. We could thus find two viewpoints: "how hospice volunteers should be" and "what I should do as a hospice volunteer". We think that these results provide important hints for future planning of a training course for hospice volunteers.

#### Key words

hospice volunteer image, training course for hospice volunteers, viewpoint of image analysis.

#### はじめに

日本における最初のホスピスは、1981年に誕生した聖隷ホスピス（院内独立型）である。その後、厚生労働省の緩和ケア病棟に対する診療報酬制度の認可によりホスピスの増加が促進され、一定条件下で行われる緩和ケアに対しては一般病棟でも診療報酬が加算されるようになり、2007年現在、全国で177施設、3399病床の緩和ケア病棟が誕生している<sup>1)</sup>。そのような中で、ボランティアがホスピスケアに参加するようになり、次第にホスピスケアにおける重要な存在となってきて

いる。

ホスピスの存在意義は、患者や家族のQOLを高め、ニーズにそったケアを実践することであり、その特徴は、患者や家族のニーズに基づいて、医師、看護師、介護福祉士、ソーシャルワーカー、OT、PT、宗教家、ボランティア等が家族も含めたチームケアを行うことにある。

ホスピスボランティアは、患者と関わって、患者の直面する不安の声に耳を傾け、安心感や支持を与えるだけでなく、患者の家族が抱く心配や不安にも応え、適切な支援を具体的な助言や行動を通して提供し、関

---

鈴木 聖子 (すずきせいこ)  
山本 克彦 (やまもとかつひこ)  
吉田 清子 (よしだせいこ)  
櫻 幸恵 (さくらゆきえ)

わっていく事に特徴がある<sup>2)</sup>。したがって、ホスピスボランティアは単なるマンパワーでないことは明らかであり、ホスピスにボランティアが参加することへの要望も高まっている。

そのためには、医療関係者を中心とするホスピスボランティアを含むチームでの協力が必要不可欠である。さらに、昨今の社会のニーズとともに増加の傾向にある緩和ケアにおけるホスピスボランティアの存在意義が大きく問われており、緩和ケアチームの一員としての明確な役割も期待されている。

このように、ホスピスケアは、多様なニーズに応えるためにチームで行われることが一般的であり、医師や看護師、ソーシャルワーカーなどフォーマルなケアサービス提供者とボランティアや家族、友人、近隣の人々などインフォーマルなケアサービス提供者が協同してケアを行う必要がある。

藤沢<sup>3)</sup>は、院内ホスピスにおけるボランティア活動内容として、直接的ケアと間接的ケアに分けられるとし、直接的ケアはベッドサイドでの患者との話、入浴介助や買い物介助などであり、間接的ケアは掃除や洗濯、環境整備、コンサートや季節行事等の準備や運営をあげている。

筆者ら<sup>4)</sup>が行った全国調査においても、ホスピスボランティアの存在意義は大きく、たとえば、社会の接点における存在としての地域社会と病棟の架け橋、ホスピスが地域で発展するためのキーパーソン、チームの一員である等の回答が寄せられ、種々の期待を持っている施設は多く、ボランティア養成講座の実施やその内容の充実が課題とされていた。

また、ホスピスボランティアが行っている活動内容として、専門的技能を用いる事、癒しの環境(場)をつくる事、病院の行事運営への関与、日常生活サポートなどケアの一部代行、組織化への関わり(遺族ケア、遺族会・家族会への参加等)の6項目に分類することができ、遺族に対するケアについても関わっていることが明らかになった。

さらに、ホスピスボランティアコーディネーターには資格的条件、人格的条件、経験的条件、知識・技術的条件などを設定している施設も見られ、ホスピスボランティアコーディネーターを中心とするボランティアの組織化への期待も示唆された。

このようにホスピスボランティアに対する種々の期待感があるものの、ボランティア養成に関する事項や

役割等についての実証研究は見あたらない。

2006年度より、筆者らの研究会では、ホスピスボランティア養成講座マニュアル作成を意図しつつ、A県の緩和ケア病棟誕生を契機に、地域住民を対象とするホスピスボランティア養成講座を継続的に行う中で、養成講座開催についての方法論の蓄積に取り組んでいる。

以上の背景のもと、本研究は、ホスピスボランティア養成講座マニュアル作成にむけて、養成講座受講者が、ホスピスボランティアをどのように受けとめ、ホスピスボランティアのイメージがどのように形成されたのかについて明らかにすることを目的とする。

## 研究方法

### 1. 研究対象

本研究の対象は、A県の緩和ケア病棟開設に伴い、2006年(以下講座A)2007年(以下講座B)に開催された各養成講座の受講者である。

受講者は、広く地域の新聞等で募集を行った。希望者は、講座A35名、講座Bは26名であった。各養成講座の状況は資料に示すとおりであるが、講座Aは、2006年11月から12月の期間で連続4回計16時間行われた。講座Bは、2007年10月から11月の期間連続2回で計16時間行われ、両講座ともに、主催者、時間数、内容、担当講師等、同様のプログラムであった。

データ収集は、養成講座受講前と後の2回行い、「どういうホスピスボランティアになりたいか」という設問について、講座開催会場で記入を依頼し、その場で回収した。

養成講座の進行は「知識・情報伝達型ではなく、できる限り相互学習型の場づくりを心がける」という確認のもと、ワークショップ形式で実施している(資料参照)。また講座の各場面は受講者に対する操作的・評価的な言動を避け、自由な発想や発言ができる場を保障することに十分な配慮を行なった。したがって、設問に対する回答は個々の受講者の内面を表すものとして十分に信頼のおけるデータと考えられる。

### 2. 分析

#### 1) 分析対象:

ホスピスボランティア養成講座を受講し、受講前と受講後に「どういうホスピスボランティアに

なりたいか」の設問に回答のあった講座A受講の35名と講座Bを受講し、受講前と受講後に回答が得られた26名の計61名の記述用紙である。

2) 分析方法：

【分析1】

講座A受講者35名と講座B受講者26名の養成講座前後に記述された内容について、全体を詳細に読み、意味内容の類似性により分類した。分類内容は①ホスピスボランティアについてわからない、手がかりを得たいという表現が記述されていること②ボランティア活動手段が記述されていること③私の態度について表現されていること④家族・チームについての表現が記述されていること⑤ボランティアイメージの表現が記述

されていること⑥イメージ・態度・方法について記述していないの6項目があげられた。上記の②・③・④・⑤については、肯定的記述ととらえ①と⑥は否定的記述ととらえた。

次に、上記6項目のうち、下点線で示した②ボランティア活動手段③私の態度⑤ボランティアのイメージの3項目については、さらに詳細な分析が可能な内容が記述されていることから、講座A35名および講座B26名、計61名の受講前後の内容について、個別の分析を②③⑤に沿って忠実に行った。その結果、上記3項目は、ホスピスボランティア養成講座における受講者の効果評価を行う際の分析視点としての可能性が示された(表1)(図1:一部例)。

表1 分析の視点

②ボランティア活動手段
③私の態度 / 希望
⑤ボランティアイメージ

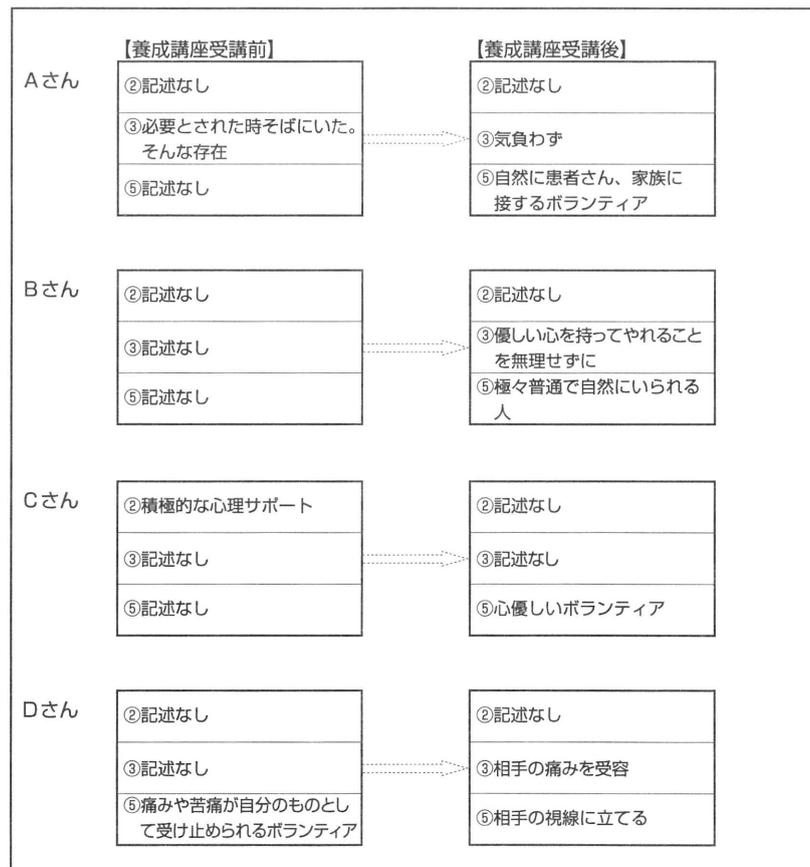


図1 表1に示す分析の視点に対応する研修前後個人別比較例

## 【分析2】

次の段階として、本養成講座受講後のボランティアイメージを把握する事を目的に講座Aと講座Bで得られたデータ61人分について、質的統合法（KJ法）<sup>5)6)</sup>を援用してデータ分析を行った。その理由は、ホスピスボランティア養成講座の受講者は、さまざまな背景をもち、幅広い年齢層であることから広い視点からのボランティアイメージの分析可能性を探る必要性があったこと。養成講座の受講動機は種々考えられるが、受講生は、本講座によって、どのようなホスピスボランティアをイメージすることができたのかを構造的に捉えること。

さらにその意味や養成講座推進における示唆を得るための分析の視点として、質的統合法（KJ法）が適していると考えた。

具体的には、61名分のデータについて個別分析を各対象者に行った。そのプロセスは、「ホスピスボランティアにどのようなイメージをもつことができたか」をテーマにラベルを作成、それを単

位化し、得られた単位総数は141である。さらにグループ編成を繰り返し、最終的に7つのグループになったところで最終ラベルの内容を表す表現を記した。

## 結果

## 1. 分析1の結果

## 1) 養成講座受講前後の変化

回答者は、講座A35名であり、男性4名（11.4%）、女性31名（88.6%）と女性が圧倒的に多く、講座Bについても男性0人、女性26人（100%）と同様の結果だった。講座Aの平均年齢は51.5歳（SD11.4歳）であり、年代別にみても50歳代が14名（40.0%）を占めていた。次いで40歳代が8名（22.8%）であり、20歳代、70歳代も各2名の回答が見られた。講座Bは、平均年齢49.8歳（SD14.2歳）、年代は60歳代が7名（26.9%）と最も多く、講座Aに比べ、平均年齢は低い、年齢構成がやや高かった。（表2）。

表2 養成講座参加者（A/人数（%））

	講座A n=35	講座B n=26
人数 男性	4 (11.4)	0
女性	31 (88.6)	26 (100)
平均年齢 (SD)	51.5 (11.4)	49.8 (14.2)
年代 20代	2 (5.7)	3 (11.5)
30代	4 (11.4)	4 (15.4)
40代	8 (22.8)	4 (15.4)
50代	14 (40.0)	6 (23.2)
60代	5 (14.4)	7 (26.9)
70代	2 (5.7)	1 (3.8)
不明	0	1 (3.8)

表3 研修前後の量的変化（複数回答）講座A 2006

項目	前	後	研修後の変化量
	人数 (%)	人数 (%)	
①ホスピスボランティアについてわからない・手がかりを得たい	25 (71.4)	0	-1
②ボランティア活動の手段が提示されている	11 (31.4)	16 (45.7)	0.45
③私の態度表現あり	11 (31.4)	17 (48.6)	0.54
④家族・チームの表現あり	4 (11.1)	8 (22.2)	1
⑤ボランティアイメージ表現あり	10 (29.4)	19 (54.3)	0.9
⑥イメージ・態度・方法記述なし	10 (29.4)	1 (0.3)	-0.9

\*変化量=（研修後の各項目人数-研修前の各項目人数）÷研修前人数

表4 研修前後の量的変化（複数回答）講座B 2007

項目	前	後	研修後の変化量
	人数 (%)	人数 (%)	
①ホスピスボランティアについてわからない・手がかかりを得たい	20 (76.9)	1 (3.8)	-0.95
②ボランティア活動の手段が提示されている	14 (53.8)	7 (26.9)	-0.5
③私の態度表現あり	8 (30.7)	17 (65.3)	1.13
④家族・チームの表現あり	2 (7.6)	6 (23.1)	2
⑤ボランティアイメージ表現あり	5 (19.2)	22 (84.6)	3.4
⑥イメージ・態度・方法記述なし	6 (23.1)	2 (7.6)	-0.66

\*変化量= (研修後の各項目人数-研修前の各項目人数) ÷ 研修前人数

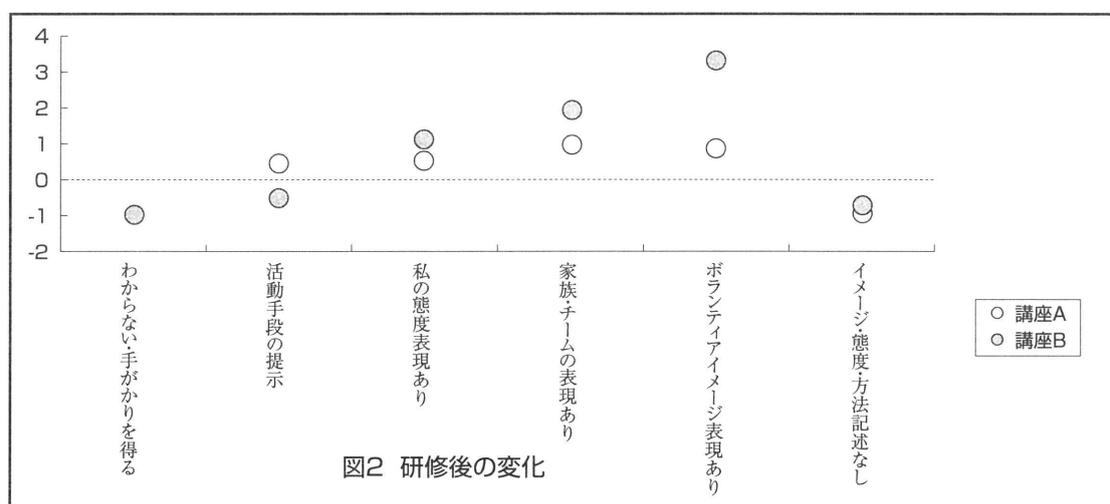


図2 研修後の変化

次に、分析方法に示した①から⑥の項目について、講座受講前後の推移と変化量を表3と表4、及び図2に示した。表3の講座Aでは、肯定的記述の変化が最も多かった項目は、④家族・チームの表現がある、次いで⑤ボランティアイメージの表現、③私の態度について、②ボランティア活動の手段が示されている、の順だった。また、否定的記述の変化項目は、①のホスピスボランティアについてわからない、手がかかりを得たい、⑥のイメージ・態度・方法の記述がない、の2項目であり、講座受講後のプラスの変化項目が多く、その項目内容はすべてにわたって肯定的な変化であった。

表4の講座Bの講座受講後にプラスの変化が最も多かった項目は、⑤のボランティアイメージの表現が5人から22人と圧倒的に多く、ついで④家族・チームの表現、③私の態度表現の順で変化が多かった。また、否定的記述の変化項目は3項目であり、①のホスピスボランティアについてわからない、手がかかりを得たい、⑥のイメージ・態度・

方法の記述なし、②ボランティア活動の手段が示されている、の順で多かった。

特徴的な点としては、①のホスピスボランティアについてわからない、手がかかりを得たい、の項目は、講座Aが25件から0件へ、講座Bが20件から1件と減少し、受講を通してボランティアに関する何らかの手ごたえを感じたのではないかと思われる、受講後の効果が現れていた。

講座Aと講座Bを比較すると、講座Bはプラスの変化項目は少ないが、講座Aに比べて各項目ともに変化量は大きく、また、プラスの変化3項目（③私の態度表現、④家族・チームの表現、⑤のボランティアイメージの表現）は、講座A・Bともに同じ項目だった。

②のボランティア活動の手段が提示されている項目は、講座Aがプラスの変化であるのに対し、講座Bはマイナスの変化を示していた。

図2には、講座A・Bの各項目の変化量を図に示したが、講座A、Bともに⑤のボランティアイメージ

の表現についての変化量の差が大きく、講座Aの受講生の変化量は0.9であるのに対し、講座Bの変化量は3.4であることから、講座Bの受講生は、ボランティアイメージの記述量が大きく増加したことがわかる。

## 2) 分析視点に基づく養成講座受講前後の変化内容 (図1一部例)

分析の視点(表1)に基づき養成講座受講前後のボランティアイメージを見ると、講座Aの場合、受講前には10件(29.4%)が記述していたが受講後には19件(54.3%)と約2倍に増加し、講座Bは、受講前、5件(19.2%)から22件(84.6%)と変化が見られた。講座Aの、ボランティアを実施する場合の方法及び内容についての記述であるが、11名(31.4%)から17名(48.6%)に増加していた。内容については良く話を聴く・本を読む・散歩・ガーデニング等であり受講前後における大きな変化は見られなかった。

さらに、ボランティアにおける私の態度については、講座Aでは、表現ありが10名(29.4%)から19名(54.3%)と全体の半数までに増加し、講座Bは、8名(30.7%)から17名(65.3%)と両講座ともに大きな増加が見られ、その内容については、受講前は私がこうしたいというように「ボランティアを行う私」主体の表現が多く見られたが、受講後には、患者さんや家族とともに実施する、自己成長などの表現が見られ、ボランティアを行う対象の拡大と、自分自身の成長として考えている者もみられた。

家族やチームについての記述は、講座Aの受講前4名(1.1%)から受講後は2倍の8名(2.2%)に増加していた。講座Bについても、受講前2名(7.6%)から受講後6名(23.1%)と変化していた。その中には、病院職員との連携という表現が見られ、ボランティア実施にむけての専門職との連携という視点が新たに形成されていた。

## 2. 分析2の結果

分析方法2に基づいて、61名の記述したデータ141件を分析した。そのプロセスは、各データの類似する内容のグループ編成を繰り返し、最終の7ラベルについて、それぞれの関連性を検討する中で、「ホスピスボランティアの価値」と「ホスピスボランティアとして私は何を」という2つの視点を見

出すことができた。

「ホスピスボランティアの価値」については、〈存在の価値〉・〈活動の場での価値〉・〈これからめざす価値〉の3つの視点に分類することができた。また、「ホスピスボランティアとして私は何を」については、〈負担感を感じさせない安らぎの環境づくり〉を示す事ができた。

次に、各ラベルの示す内容について記述する。

「ホスピスボランティアとしての価値」

〈存在の価値〉

《患者・家族にとっては空気のような存在》

このテーマについては、患者・家族の邪魔にならないようにという思いが強く表現されている。患者・家族に少しの負担もかけず、負担を感じさせないような存在のありようを意味する。

そのためには謙虚さが重要であり、患者・家族から学ぶ姿勢をもち、必要な時に必要なことができるような存在としてのありようが示されている。また、生活環境の1人という表現を用いてホスピスボランティアとしてのありようを表現していた。

〈活動の場での価値〉

《過去の経験にとらわれない緩和ケアチームの一員としての連携》

ここでの過去の経験にとらわれないとは、自分の過去の仕事の価値観等を持ち込むことはせず、私ならこうするという意識を極力抑え、今の相手の思いや気持ちを想像する力をもつことを意味している。そのためには、一人のホスピスボランティアとして、知識や経験にとらわれない柔軟な態度で臨むボランティアとしての存在感が示されている。

また、緩和ケアチームの一員としての範疇や病院の理念を守ることの重要性和チームの連携、そして、常に患者主体の思いは、活動の場におけるありようとして欠くべからざるものである。

〈これからめざす価値〉

《ホスピスの理念を地域に広める(施設から在宅へ)》

ホスピスの考えやホスピスの存在について地域住民にも広めていけるようなホスピスボランティアの価値として、社会的に広くホスピスの理念が伝えることができるような活動に関わることを意味する。

上記の3領域からみた、価値はホスピスボランティアの研修から得られた価値であり、受講生の認識としての価値を意味する。ホスピスボランティア

の実践を通して推測される変容可能性については、今後の継続的課題である。

意味をもつ。前向きな自分らしさの発揮とライフワークとしての活動と考えることができる。

「ホスピスボランティアとして私は何を」

「ホスピスボランティアとして私は何を」のテーマの目標として、負担感を感じさせない安らぎの環境づくりをあげることができる。

その環境とは、患者・家族が「ほっと」できる環境を意味し、それはほっとできる場であり、ほっとできる時間であり、ほっとできる人である。

ほっとできる人は、あったかいほっとするような感じの人、安心感のある人、自然体で相手に負担に思われない人である。ほっとできる時間は、家族同士が思いを話すことができるような場づくりを含むお茶のサービス、ガーディニング、買い物、散歩、あかるい安らぎの場づくりを上げている。そのような環境づくりはどのようにして行われるのかについては次のように3つの視点をあげることができる。

1つは、  
＜時間を共有する・傾聴する・寄り添う・共に感じる＞である。

ここでは、常に相手の立場に立つことが重要であり、一歩下がって傾聴することで気持ちの共有が少しでもできたならというホスピスボランティアである。また自分の得意分野を活用してもらえらば、そのことで時間を共有することもできるというように、患者・家族の必要に応じた関わりを意味する。2つ目は＜初心を忘れることなく自分を磨き学び成長し続ける＞であり、患者・家族が主体であることを心にとめて、ひとりひとりの患者のニーズに敏感に気づき、必要とされるまで待つことができるようなボランティアであり、患者・家族との関わりを自分の学びや自分の成長にも結びつけるということの意味である。1つ目が関わり方であるとするならば2つ目は自分の存在の意義と捉えることができる。

3つ目は、＜自分自身の弱さを整理し、自分のできることを考え行動する＞である。今後、ホスピスボランティアとして活動するであろう自分を見つめると、そこには弱い自分があることもあるだろう。自分自身の弱い面をここで整理することで、活動の動機づけに結びつけることができる。小さなことでその場その場でできることを考え行動するという

## 考察

本研究は、ホスピスボランティア養成講習会前後のイメージについて自由に記述された内容を、分析の視点に基づいて量的に講習会前後の比較を行なったこと、そして自由記述の内容について、質的に詳細に分析し、講習会後のイメージを一般化することを試みた基礎的研究である。

### 1. ホスピスボランティア養成講座受講後の変化について

今回、分析の視点を設定し、養成講座受講前後の変容をみたが養成講座受講における受講者には、大きな変化が見られ、講座A、Bともに、同様の項目における受講後の肯定的な変容がみられた。このように、異なる養成講座においても、一定の成果をみる事ができたことは、養成講座プログラムや内容に一貫性をもち、養成講座講師についても同様の講師を用いたことなどがあげられるが、本研究結果から今後の養成講座においても一定の成果の可能性が期待できる。そのための具体的な手順を盛り込んだボランティア養成講座マニュアルの作成は、今後の養成講座における手引書として有効に活用可能であると考えられる。

また、今回示された分析の視点は、今後さらなる量的部分での検討が必要と思われるが、ボランティアイメージを客観的に把握する上で、有効な視点と考えることができ、一定の評価基準としての提案が可能であると考えられる。

### 2. 分析視点に基づく養成講座受講前後の評価

各個人の記述結果から、「ボランティアのイメージ」、「私の態度/希望」、「ボランティアの内容および方法(手段)」の3つの視点を抽出し、養成講座受講前後の推移をみたが、ボランティアの内容および方法については、大きな変化はないものの、「ボランティアのイメージ」「私の態度/希望」についての大きな変容は、養成講座受講における成果の一部と考えられ、今後は養成講座のプログラムの再考や検討の際の重要な根拠として活用可能性が示唆された。

### 3. ホスピスボランティアの価値について

ホスピスボランティアとして、何ができるのかと

いう実践内容や役割については、各施設の状況に添ったパンフレットの作成や実践報告等を通して示されることは多いが<sup>(7)(8)(9)</sup>、「ホスピスボランティアの価値」という側面については、実証研究という形で示されることは少なかったのではないだろうか。今回の調査から、「ボランティア」が「存在の価値」<活動の場での価値>「これからめざす価値」の3つの視点を提案することができた。このような視点は、今後の養成講座の中で受講者に伝達が可能であるという点において、大きな意義を持つものと考えられる。また、ホスピスボランティア実践者にとっては行動する際の指針として意味を持つのではないだろうか。

次に、「ホスピスボランティアとして私は何を」という自分自身への問いかけである。この場合も3つの視点を提案することができた。何をを行うことができるのかという方法論については自分の得意なことの実践や癒しの環境づくり等、養成講座受講前でも提案することは可能である。しかし、ここでのホスピスボランティア実践者としての私への問いかけは、自己成長を中心とする問いかけであり、自分に対するボランティアの意義の確認ではないだろうかと考えられる。

つまり、金子が<sup>10)</sup>、ボランティアを『つながりをつけようと自ら動くことによって新しい価値を発見する人』と表現するようにボランティアは人と人のダイナミックな関係性を通して新しい価値が発見できるところに大きな意義があるのではないだろうかと考えられる。

#### 本研究の限界と今後の課題

本研究は、限られた講習会参加者を対象とする調査であったために研究結果を一般化するには限界がある。しかし、2箇所で行われた講習会を分析したものであること、同一参加者の講習会前後の調査であること、講習会の実施者が同一であること等から、今後の調査継続における基礎的なデータは得られたものと考えられる。今後は、在宅ホスピスボランティアあるいは、高齢者福祉施設等におけるホスピスボランティアを視野においたボランティア研修について継続的に調査を進めていく意義は大きい。今後ますます進行する高齢化の流れの中で、地域に密着した質の高い在宅ケアが求められており、

今日の制度の隙間に対応できるためには、ボランティアの養成が急務であると考えられる。また、ホスピスボランティア養成講座を通して潜在的なボランティア希望者の発掘も促進されるのではないかとと思われる。

#### 引用文献

- 1) 全国緩和ケア病棟承認施設一覧:緩和ケア17 (6) Nov 2007 541-543.
- 2) 横山穰:ターミナルケアにおけるボランティア養成のための援助方法に関する一考察, 社会問題研究, 44 (2) 1995 152.
- 3) 藤沢真理子:地域ケアネットワークにおけるホスピスボランティアの役割,日本の地域福祉,日本地域福祉学会,13,1999, 37-50.
- 4) 鈴木聖子・山本克彦・吉田清子:ホスピスボランティア養成に関する基礎的研究～ホスピスボランティア全国調査からの一考察～, 岩手県立大学社会福祉学部紀要10 (2008.3) 31-45.
- 5) 正木治恵:看護学研究における質的統合法 (KJ) 法の位置づけと学問的価値, 看護研究, 41 (1) 3-10.
- 6) 山浦晴男:科学的な質的研究のための質的統合法 (KJ法) と考察法の理論と技術, 看護研究, 41 (1) 11-32.
- 7) 江木さよ子:緩和ケア病棟設置に対する看護部の取り組み, かんご, 日本看護協会出版会, 51 (3) 1999, 35-38.
- 8) 寺永守男,石山洋美,嘉藤茂:ホスピスボランティア活動に対する医療スタッフの認識について,第8回秋田県緩和医療研究会 ホスピス開設5周年記念誌 外旭川病院 2004 52.
- 9) 久保山千鶴:ボランティアとともに4年目を迎えて, 看護管理, 医学書院 8 (1) 1998 17-21.
- 10) 金子育容:ボランティアもうひとつの情報社会, 岩波新書235, 1999, 7.

#### 謝辞

本研究の調査にあたり、お忙しい中、ご記入くださいましたホスピスボランティア養成講座受講のみなさま、また、養成講座実施にご協力いただいた社団医療法人恵生会孝仁病院および岩手県立磐井病院のみなさま、本研究の準備段階からご協力いただいた岩手にホスピス設置を願う会のみなさまに厚く御礼を申し上げます

ます。

※ 本研究は、平成20年度公立大学法人岩手県立大学  
学術研究費公募型地域課題研究の助成を受けて行い  
ました。

【資料】

緩和ケア病棟ボランティア養成講座例（一部）「なぜボランティアになるのか」

時間	内容	担当
10：00～11：00	講義「病院ボランティアについて」	A
11：15～12：20(日)	ワークショップ「なぜボランティアに参加するのか」	B
13：35～14：30	講義「ホスピス・緩和医療の理解と現状」	C
14：40～15：30	講義「痛みの実際とケア」	D
15：30～16：00(月)	ふりかえり	E

①ワークショップ形式の効果的場面（一部）

場面	ファシリテーターの具体的な言葉がけ	意 図
開始時	「ワークショップという言葉を書いたことがありますか？」他 a. (PPTと直前の講義内容を話題にしながら)「みなさんが、いまここでの自分を意識し、参加・体験すること、気づきを大切にしましょう」 b. 「ワークショップは“作業場、工房、筋書きのないドラマ”、みんなで何かを作りだす場です」	参加者の学習準備性を確認するための問いかけをする。 a. 体験学習の概論的内容に触れるとともに、 b. 専門用語を容易に言い換え、安心感を与えるよう配慮をする。
導入① 1対多の アイスブ レイク	a. 「恒例の“前にいる私（ファシリテーター）は何歳でしょうクイズ”をします。30秒お時間を差し上げますので、私の年齢を頭に浮かべてください。ヒントは“2桁”です」 b. (正解を伝えた後)「みなさんは何を根拠に私の年齢を推測しましたか？」 「着てる服とかお腹のたるみ具合とかいろんな情報を元にその人の年齢を考えますよね」 「第一印象は結構曖昧なんですよね」	a. 全員起立し「〇歳だと思っ人は座ってください」と順に年齢を上げて行き、最後に正解を伝える。ユーモアを交え、場の雰囲気や和らげるとともに、 b. こうした「簡単な演習にも第一印象や印象形成について考える学習要素があること」を体感する機会とする。
導入② 多対多の アイスブ レイク	a. 「ちょっとお手伝いしてくれる方、どなたかいらっしゃいませんか？」 (参加者1名に対し)「Y（ファシリテーター）です、よろしくお願ひします（と握手を求める）」 (参加者が握手であいさつに応えた後)「ありがとうございました。こんなふうに今日の参加者のみなさんどうし、10人と出会ってみましょう」 b. 「もし、私、今日は体力ありませんという方はその場に座っていてかまいません。座ってても誰かしら近づいてきて挨拶してくれると思いますよ。何らかの理由があって私は握手ができないという方も無理しなくて結構です」	a. 協力者を求めたり、1対多から、参加者どうしの交流を促すアイスブレイクを実施することで、全体の緊張や不安の度合いを把握する。表向きは自己紹介ゲームという伝え方をすることで、この講座そのものが開放的な場であることを体感する機会とする。

	<p>c.「みなさん、挨拶した方の名前は全員覚えてますか？。じゃあ、顔なら覚えてますか？」</p>	<p>b.初対面での握手や演習そのものに抵抗がある参加者への配慮として、参加しない選択肢も設定する</p> <p>c.何気なく体験するのではなく、意識化することを促す。</p>
展開	<p>a. (ワークシート“「私」についての4つのことがら”を配布し)「思いつくままに自由に記入しましょう。特に正解があるわけではありません。あなた自身が感じたことですから、すべてが正解ということもできます」</p> <p>b. (記入できた様子を見て)「ワークシートに記入したことをグループごとに好きなようにまとめてください。自由にやってもらってかまいません」</p> <p>「すいませんけど、グループごとにマジックと模造紙を取りにきてください。」(わざと配らず取りに来てもらう)「終わったら他のグループを見てまわったりしてみてください」</p>	<p>a.4つの設問はこの講座にどのような立場で参加したか、“今の気持ち”、“講座への期待”、“参加した理由”とし、参加者個々の自己覚知を促す。また学習効果を考え、ありのままに自己開示できる場であることを伝える。</p> <p>b.参加者個々の自己開示とともに、グループワークの機会を通して、グループ状況、グループ内での個々の役割等を観察し、以降に活用する。</p>
まとめ	<p>a. (一部グループで拍手が起こる)「なんだかすごく盛り上がっているグループもありますが、そのグループは以前からのお友達ですか？」(実は今日出会ったばかり)「チームワークですよ。共同作業ですよ。ボランティアには必要なことです。」</p> <p>b.「今の中で自分が果たした役割は何だったか。紙を切り貼りする人、書く人、話す人、進める人、ポーとながめていた人。その作業に関わった自分がどうだったかを考えてみてください。」</p> <p>「自分の思いをみんなに共有する。他の人の意見をみて共感したり、うれしくなったり、励みになったり、多様な価値観を感じたと思います。」</p> <p>c.「今作ったものは壁に掲示しておきますので、最後のふりかえりの時間に、また今のグループで見つめなおしてみましょう。では最後に、見つめ合って、にっこり笑って終わりにしましょう。」</p>	<p>a.グループワークにおけるCSSプロセス（キャッチ：参加者の前向きな反応を捉える、スポットライト：その反応に全体の注目を集める、スプレー：その反応を波及する）に注目し、講座のねらいと照らしながら、いまここで起こっている自己あるいは集団の変化に気づく機会とする。</p> <p>b.グループ内で自分がどのような役割を果たしたか、他の参加者の関係はどうであったかなど、ふりかえる機会とする。</p> <p>c.アクティビティの継続性を意識できるように、このグループワークの成果を見直し、グループメンバーを確認する。</p>